2024 年度 ベトナム研修 報告書

医療科学部　放射線技術学科　3 回生　　氏名 中村　藍

〈 研修概要 〉

2 月 25 日から 3 月 5 日までの 9 日間、ベトナム研修に参加しました。ホーチミン市のチョーライ病院で研修を受け、フエ市ではフエ医科薬科大学附属病院での実習や講義を通して同大学の学生と交流しました。ベトナムの文化、医療、診療放射線技師について学ぶ貴重な経験ができました。

▲フエ医科薬科大学での集合写真

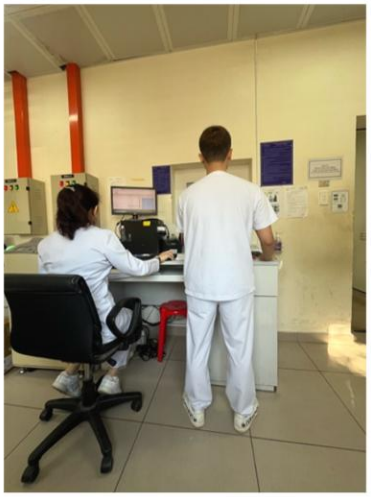
〈 研修参加の目的 〉

価値観を広げることによる自己成長を目的に本研修に参加しました。高校生の頃にドイツの学生と交流する機会がありました。最初は自分の英語に自信が持てず会話に躊躇していましたが、勇気を出して話かけてみると拙い英語でも会話を楽しめ、日本とドイツの文化の違いを知ることができました。失敗を恐れて「できない」と挑戦を避けることが、自身の成長を妨げていると気づきました。失敗を恐れずに何事にも積極的に挑戦することが価値観を広げ、自己成長に繋がると考えたため、本研修への参加を決意しました。

〈 研修で学んだこと 〉

<u>チョーライ病院での研修</u>

チョーライ病院は患者数が非常に多く、検査の回転率を最優先されていました。チョーライ病院の技師の方の働く姿から、迅速で正確な検査には業務の効率化が不可欠であることを知りました。技師の方は 1 人で患者の呼び込みと情報入力、撮影、画像フィルム印刷を担当していました。多くの業務を効率的に遂行するために複数の業務を同時進行する無駄のない動きに感銘を受けました。また、検査効率を向上させるために CT や MRI では患者の静脈路を事前に確保し、胸部単純撮影では患者が自分自身でポジショニングし、技師の方は照射野を調整せず、検査室の扉は閉めずに撮影していました。日本では被曝低減やプライバシー尊重を優先しますが、チョーライ病院では検査効率の優先順位が高く、医療環境の違いに衝撃を受けました。



▲チョーライ病院での研修

日本はベトナムに比べて病院の数が多く、特定の病院に患者が集中することは少ないですが、チョーライ病院はベトナム南部唯一の総合病院であるため、患者数が非常に集中していました。このような医療環境の違いから、日本では被曝低減やプライバシー尊重を重視しますが、チョーライ病院では検査効率を重視しており、その優先順位の違いに衝撃を受けました。優先事項の決定、時間の有効活用が業務効率化に繋がると学びました。一方で、無駄な被曝が増え、プライバシーが守られない可能性があるため、効率化に伴うリスクも理解する必要があると感じました。また，私は完璧主義で要領が悪いことが多くありましたが、今後はタスクの優先順位を意識して効率的に行動したいと感じました。

フエ医科薬科大学附属病院での研修

ベトナムでは臨床実習学生も検査できるため、ポジショニング・静脈路確保・撮影などの技術や画像所見の理解が臨床の技師の方々と遜色なく、私との臨床経験や知識量の差に驚きました。研修中には胸部単純撮影のポジショニングを経験しました。最初はうまくできませんでしたが、先方の学生や技師の方に教えていただき、回数を重ねるうちに正確なポジショニングができるようになりました。患者に伝わりやすい説明方法や体格ごとに適切な照射野の調整を学べました。実践経験で得た知識を 4 年次の臨床実習に役立てたいと思いました。また、日本とベトナムの医療情報設備の違いも教わりました。日本は PACS が普及しており、デジタル形式で画像を読影・保存しており、ネットワークを介して画像を閲覧できます。一方、ベトナムでは PACS が普及しておらず、ネットワークを介した画像閲覧ができないため、画像をフィルムに印刷して患者に渡し、患者が受診している診療科で画像を確認できるようにしていました。このように、デジタルシステムが整っていない環境での診断が可能であるという利点がありますが、フィルムの劣化や保管場所確保が問題です。以前は日本でもフィルムが使用されていましたが、PACS の普及によってフィルムの使用機会がなくなりました。フィルムを使用する医療現場を見学でき、フィルムの利点と欠点を学ぶ貴重な経験になりました。

▲臨床実習 1

▲臨床実習 2

フエ医科薬科大学の学生との交流

フエ医科薬科大学では、先方の学生と医療に関するゲーム形式の講義を一緒に受けました。また、病院研修後は毎日、先方の学生がバイクで夜ご飯や観光に連れて行ってくれました。私は拙い英語しか話せませんでしたが、ジェスチャーと組み合わせることでコミュニケーションをとることができました。言語はコミュニケーションの一手段に過ぎないことを実感し、自分の気持ちを伝えようとする積極性と相手の意図を汲み取ろうとする姿勢が重要であることを学びました。臨床では患者の年齢や状態に応じて適切なコミュニケーションが必要なため、この学びは患者接遇にも通底すると感じ、診療放射線技師として働く際に意識したいと思いました。

▲大学での授業

▲フエの学生との交流

〈 まとめ 〉

本研修での沢山の学びを通し、自分の価値観を広げられたと実感しています。この貴重な経験を活かし、自身の思考や行動を洗練させたいと思います。簡単な英語やジェスチャーを駆使して先方の学生と仲を深められた経験から、母国語が異なる相手とのコミュニケーションに自信がつきました。彼らとの出会いで得た学びや視座は人生の糧になると感じています。今後もこれらの縁を大切にし、世界の医療について深く学びたいです。

〈 謝辞 〉

本研修を受け入れてくださったチョーライ病院とフエ医科薬科大学の皆様に深く感謝申し上げます。また、引率してくださった玉木学長、霜村先生、本谷先生、石田先生、研修の準備をサポートいただいた本学職員の皆様に深く感謝申し上げます。